追悼　山本健一郎氏

山本健一郎君追悼記

佐薙　恭（昭31年卒）

山本健一郎君の長い山行歴の最後の山行は、間違いなく06年3月30日の丹沢・檜洞丸だと思う。同行者は本間君と私の二人。私の思いつきでスタートした「ぐるり丹沢（大山から不老山まで）」の核心部を歩く第1章だった。

三人でツツジ新道から山頂へ、そして犬越路を経て神ノ川ヒュッテ泊。翌31日、所用があるという彼は、大室山に登る二人と別れ小屋番の車に便乗して下山した。この山行を含め、彼との最近数回の山行で時々気になっていたのだが、彼の歩きっぷりには「ちょっと変だな」と感じさせる何かがあった。

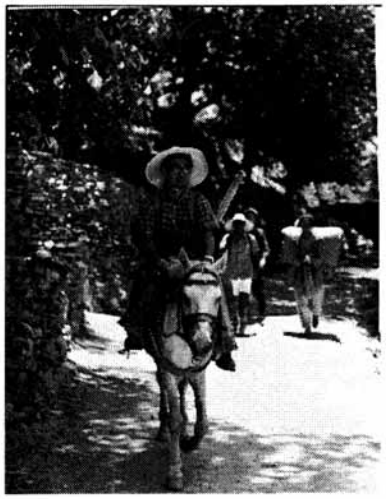
この山行後の三月会（4月17日）の記録を彼がまとめている。自分の体調などについては何も書いていない。ひょっとして検査入院のことを当日話したのかもしれないが私の記憶にはない。日記を読み返すと5月2日「悪い知らせ、山本健・食道ガンの手術が必要」とある。彼から検査入院の結果の連絡があったのだ。これがあの気がかりな歩きっぷりの元凶だったのか。

その元凶退治の手術は5月22日、11時間もかかったという。6月11日に退院。三月会への復帰は10月、それ以降は皆勤。11月のアダージオの会合でも、12月の吉田義則兄の告別式でも一緒に山讃賦を歌った。今年1月の針葉樹会新年会にも顔を見せていたし、3月の懇親山行の参加申し込みは彼がトップだったという。そしてやや遅く登板してきたメール通信「HUHAC」での、このところの彼の発言回数の多さや内容の密度の濃さは彼の面目躍如だった。

どうやら彼の体調は回復したようだし、あの「薀蓄」やら「毒舌」を聞きながらの山行も今年はいくつかあるだろうと楽しみにし始めた矢先の突然の訃報だった。今朝亡くなったとの知らせを電話で本間君から聞いたのは2泊予定の「ぐるり丹沢」最終章に本間君、竹中君と出かける前日、2月26日の夕方、パッキングも終った頃だった。最終章の延期を即決した。

学生時代の彼との山行は合宿が殆どで、二人だけの山行はなかったように思うし、なにしろ半世紀以上も前のことだから記憶はぼんやりしてしまった。はっきりと思い出すのは彼が九死に一生を得た「逆さに見えた上高地」（会報108号P34）の合宿くらいだ。滑落現場にいた甘利の表現では「ボールが飛んで行くようだった」という。

卒業後、彼はあの望月達夫大先輩と同じ職場だったこともあり、高名な方々との山行にも恵まれたようだし、海外遠征の隊長を務めるなど、いわばセレブ的な山行を続けていたように私には見えた。それぞれの勤務地が離



れていたから彼と会う機会も殆どなかった。

彼との初めての二人だけの山行はお互いに50代半ばとなった86年の夏、テントを担いでの塩見・北岳だった。「望月さんの西天狗」に彼の山荘をベースにお供したのは90年6月だった（会報76号）。91年からしばらくの私の米国勤務中、彼からの依頼で仕様の異なるアメリカの山用テントを2張とミニヤコンカの記録の載った古いNational Geographicのバックナンバーを入手して送った記憶がある。あのあまり軽くないテントを彼が使いこなしていたのかはついぞ聞きそびれてしまった。

98年にアメリカから帰った私を真っ先に山に引っ張り出してくれたのは彼だった。私にとって初対面の蛭川君と3人で丹沢の雨山から檜岳を歩いた。02年の3月には私の60代最後の山、赤岳に、その9月にはお互いにまだ歩いたことのなかった北穂のキレットにも付き合ってくれた。

そして今何よりも彼に感謝したいのは彼が三月会（はじめは一木会）を立ち上げ軌道に乗せてくれたことだ。この会は彼の呼びかけで02年の2月にスタートした。以来ずっと続いているこの会のお蔭で、かなり年次のへだたりのある先輩から後輩までが親しく山を語り合い、飲み、そしていくつかの好企画の山行が誕生したし、これからも実現されていくだろう。この会がなければ屋久島や沼津アルプスやニペソツも経験できなかったろう。

「ぐるり丹沢」も思いつかず、その相棒も見つからなかったろう。この集まりがどれだけ私の今の生活に楽しみと活力を与えてくれたことか。本当に有難う。

ここ数年のことだが、私は思いがけない場所で、彼とばったり会うことが続いていた。米国勤務中、出張で一時帰国し暇を見つけて神保町の古本屋街を歩いていると、彼も古本を抱えていた。「お茶でも」と言いながら喫茶店に入り昼のビール。ある日、タカハシを新調した私が慣らし運転で横浜の公園歩きを終え、まずは一杯と蕎麦屋に入ると、彼はその店から出てくるところだったがUターンしてまたビール。ある時はお互いに単独で丹沢表尾根を逆方向に歩いてのばったりもあった。まだ歩き始めたばかりの彼を、ほとんど行程を終えかけていた私が口説いてすぐに下山、山麓の蕎麦屋へ。

次のばったりは多分一番新しいハップニングだったと思うが、私が家庭サービスでワイフを連れてアダージオへ。夕方散歩していると、まあここは彼の縄張りなのだが、またばったり。夕食後の酒に彼がジョインし、翌日の朝食後は彼の山荘でコーヒーをご馳走になった。私はもっぱら庭先の野鳥や樹木を眺めていたのだが、音楽好きのわがワイフは彼のマニアックなCDコレクションにびっくり。聴かせてもらったのは「魔王」を多くの有名歌手が次々に歌う珍しいCDだったらしい。

それ以降我が家では山本株が急騰。「山本山荘の音楽つき女中」で住み込みたいというわがワイフの希望をその後彼に伝えてあったのだが…。こんなふうなばったりがもう起らないのかと思うとなんとも悲しい。

わがワイフ共々、心から健一郎兄のご冥福をお祈りします。